

Library News

図書館だより No. 45
Nara National College of Technology

1998年7月 奈良工業高等専門学校図書館発行



(富雄川・本校名誉教授 石垣 昭先生スケッチ集より)

巻頭言

負の遺産の回復を技術で

図書館長 中和田 武

今日、自然破壊と環境汚染が世紀末の最大の話題となっています。これは20世紀を歩んできた人類の負の遺産といえます。そうした中で、今我々が考え行動しなければならないことは、自然を残し、地球を何世代もの後世に伝える努力ではないかと思えます。

ギャートルズの時代には存在しなかった、自然界にあり得なかった化学物質を人間は何千と創り出した。今、話題となっているダイオキシンを始めとするこれらの物質は、環境ホルモン(内分泌攪乱物質—環境中に存在して生体ホルモン様の作用を与える物質)として、自然環境のみならず、人間の生体を脅かすまでに至っていることは周知の通りです。

例えば、青少年の精子数は減少傾向にあり、還暦を迎えた館長の精子数より少ないという実験結果が出ています。このまま進めば少子化どころか人類の滅亡、地球上に生息する生物の滅亡に繋がります。正に、人類の危機といえます。

デボラ・キャドバリーは、その著「メス化する自然」の中で環境ホルモンの恐ろしさについて、環境中に存在して、偽のホルモンとして生体に作用を及ぼす物質がわかっているだけでも70種類、世界中には8万を越える化学物質が氾濫していると述べています。

また、井上民氏は、その著「生命の宝庫・熱帯雨林」の中で森林や、多植物なくしては人類の生存はあり得ないこと、虫や動物、植物と共存共栄、即ち動植物と共生できてこそ人類は繁栄し、地球の青さを維持することができると訴えています。長いジャングルでの研究実践生活の説得力のある緊急報告といえます。

21世紀は20世紀に破壊しつくした自然を本来の姿に戻す世紀となるのではないかと考えます。既にそのことに気付いた先進国では、造成地をもとの湿地に戻す努力が始まっています。葦の繁みに小鳥がさえずりトンボが飛び交う状況も生まれつつあります。日本でもコンクリートで固められた河岸を自然石と土で覆土し、元の自然な河岸に戻す努力が始まっています。

また、自然破壊と平行して、人間の心の破壊も進行しています。21世紀は「心の時代」(人間本来の心を取り戻す時代)とも言われています。20世紀の支払いの付けを黒字に転化させるパワーは21世紀を支える学生諸君の双肩にかかっています。特に科学技術に携わる諸君は20世紀の利便性、利益追求の技術ではなくエコロジー中心の科学技術、特に破壊された自然を元に戻すハイテクを、自然を汚染しない化学物質を研究開発してほしいと願います。

そのためには、現状認識に始まり、地道な研究・実験、成果・実行へと進める力をつけることが必要です。本を読み、話を聞き、現状を自分の足と目で確認することがその第一歩だと思います。身近な例を挙げれば、学内のゴミ問題への取り組みも私たちにできる簡単でも大切な努力です。本年4月から全学で取り組んだ結果、分別収集が可能になったことも技術者の卵としての学生諸君の自覚の表れと、大変嬉しく思っています。

ゴミ問題を一過性の問題としてではなく、21世紀の技術者はどうあるべきかを考えるスタートと捉えて欲しいと願っています。

図書館では、学生諸君がこれらの問題に関心を持ち、さらに深く幅広く学習できるよう関連資料を充実させていきたいと考えています。

目

次

巻頭言—負の遺産の回復を技術で—	平成10年度読書感想文コンクールについて	…12
図書館長 中和田 武…1	平成10年度(1998年度)・図書館委員会	…12
特集 情報化と図書館	平成9年度(第2回)多統表彰について	13
卒業生からのメッセージ	第10回 ブック・ハンティング	…14
新任教官からのメッセージ(その1)	図書館からのお知らせ等	…14
心に残る一冊の本(その8)		…9

特集 情報化と図書館

グーテンベルク

一般教科 桐川 修

みなさんはグーテンベルクという人の名を聞いたことがありますでしょうか。ヨハネス・グーテンベルク (Johannes Gutenberg)、ドイツのマインツという町に生まれた人で、15世紀中ごろに世界ではじめて活版による印刷術を発明した人といわれています。それまでの手作業による木版印刷に比べ、機械的つまり短時間で大量に書物を印刷する事ができるようになり、知識の伝達に大きな貢献を果たしました。そのため火薬・羅針盤とならんでルネサンス期の三大発明のひとつとされています。

ところで、現在ドイツでこの人の名を冠した『グーテンベルク・プロジェクト』という事業が進められています。これは、世界の文学作品をインターネット上で公開しようというもので、デジタル図書館 (Die digitale Bibliothek) との名前もついています。すでにイソップ (Aesop 古代ギリシャの動物寓話作者) からゾラ (Zola フランス自然主義の小説家) までおよそ180人の作家の作品がインターネットで読めるようになっています。(もちろんドイツ語です。) もし近くにインターネットにつながったコンピュータがありましたら、ブラウザソフトで <http://gutenberg.aol.de/gutenb.htm> を開いてみてください。(ひょっとしたらドイツ語の特殊文字がうまく表示されていないかもしれません。その場合は『文字コード』を欧文用に変えてください。) 左の枠内にアルファベット順に縦に作者の名前がなっています。(イソップが最初で、ゾラが最後です。) 知っている名前がありますか? 名前をマウスでクリックするとその作家の簡単な紹介の後、作品名があらわれます。そしてその作品名をクリックすると本文が出てきて読めるようになります。もちろん印刷も可能ですので、ぜひ一度覗いてみてください。

漱石とコンピュータあるいは電子情報とのつきあい方

一般教科 武田 充 啓

むろん漱石の時代にコンピュータなどなかった。当時でいえば、万年筆がそれにあたるかも知れない。「余と万年筆」(1912年)と題する文章の中で漱石は、ふつうのペンの値段の数百倍もする万年筆が飛ぶように売れることに驚きながらも、万年筆が時代の必需品となったことを認めている。そして「余の如く機械的の便利には夫程重きを置く必要のない原稿を書いてあるもの」、「万年筆に多少手古擦つてあるものですら」、いったん使いはじめた万年筆をやめることの不便には耐え難い、というのである。

余は、各種の万年筆の比較研究やら、一々の利害得失やらに就て一言の意見を述べる事の出来ないのを大いに時勢後れの如くに恥じた。酒吞が酒を解する如く、筆を執る人が万年筆を解しなければ済まない時期が来るのはもう遠い事ではなからうと思ふ。

(前掲文)

私たちはコンピュータ(あるいは電子化された情報)を「解しなければ済まない」時代に生きている。しかしインターネットの時代だからといって、紙の本がなくなってしまうというわけではない。今のところでいえば、コンピュータはむしろ本を真似ようとしているかにさえ見える。しかし電子化された情報とのつきあい方は、これまでのような紙に書かれ印刷された文字や絵とのつきあい方とはまったく異なったものになるだろう。情報の電子化は、本をなくすのではなく、私たちの「読み書き」の仕方を確実に変えていくのである。

たとえば、本を「最初から最後まで読む」という読み方から、「検索機能を使った拾い読み」へ

ミシガン大学における 情報図書館

機械工学科 坂本 雅彦

(「ブラウザ」は browse=ざっと目を通す、から来ている)。映像の「意味を解読する」(つまりは映像を文字と同じようなものとして扱う)ことから、映像を引用し、加工し、変形すること、すなわち編集しつつ「映像そのものと戯れる」方向へ(音楽を音として楽しむとき、ふつう私たちはそうしている)。そこでは「読み込む」ことよりは「参照する」ことの方に重点が置かれる。ある箇所から別の箇所へのジャンプ。そのことだけならば、これまでの読み巧者にだって可能である。しかしそこで重要なのは、言葉の帰属先や移動のプロセスを問うことではなく、その驚異的な速度と、圧倒的な量とによってもたらされる出会いのうちに浮かび上がってくる「関係」そのものを生きることなのである。現時点で実現されつつあるものでわかりやすくいうとすれば、それは「閉じて完結している」テキストから「未完だが他へとリンクできる」ウェブへという方向である。

無精な余は印気がなくなると、勝手次第に机の上にある何んな印気でも構はずにペリカンの腹の中へ注ぎ込んだ。又ブリュー・ブラックの性来嫌な余は、わざわざセピア色の墨を買って来て、遠慮なくペリカンの口を割って吞ました。其上無経験な余は如何にペリカンを取り扱ふべきかを解しなかつた。

(同上)

ここには無謀な「リンク」を試みる漱石がいる。しかし私は万年筆というメディア(あるいは「情報」とこのようにつきあう漱石を好ましく思うのである。

(筆者のホームページ <http://www.libe.nara-k.ac.jp/~takeda/soseki&computer.html> から幾つかのリンク先に飛んで行けます。そちらの方もよろしく。)

1996年10月1日から約11ヶ月間、文部省在外研究員(若手)としてミシガン大学(アメリカ合衆国)工学部(Mechanical Engineering and Applied Mechanics, MEAM, Professor Wen-Jei Yang 先生)に滞在する機会を得ました。この滞在中に利用したミシガン大学の図書館とこれを支援する情報ネットワーク環境について以下に紹介させていただきます。

全米でも屈指の州立大学として歴史あるミシガン大学は、Detroit 近郊の緑豊かな Ann Arbor 市にあり、工学部中心の北キャンパス、医・理・人文系の中央キャンパスおよび体育施設中心の南キャンパスに分かれています。学内には20もの図書館が設置されており24時間体制で管理運営されています。保有する蔵書数は約600万冊を越え、雑誌やマイクロフィルム等の図書を入れるとさらに膨大なものとなり、もちろんこれらの図書は市民に開放されています。これら図書を管理運営する支援システムとして、ネットワークシステム(100Mbps FDDI Ring の分散型ネットワーク)が全学的に張り巡らされています。この内北キャンパス部分のネットワーク管理には CAEN (Computer Aided Engineering Network) が24時間体制で行っており、図書検索サービス(MIRLYN: MICHIGAN RESEARCH LIBRARY NETWORK) はじめ各種のインターネットサービス(E-mail, Gopher, Net-News, WWW等)を受けることができます。MIRLYNによる図書検索サービスでは著者名、題目、発行所、キーワード等を入力後、直ちに図書の位置、番号、そして貸し出し状況等が一覧でき、図書の貸し出しや複写依頼等もオンラインで可能です。図書の貸し出しがなされている場合には、当事者宛に直接問い合わせがなされ、およそ2週間程度で手に入れることができます。また、図書を安全にかつ迅速に処理するため各自の管理能力が問われ、延滞図書に対してはその超

過日毎1 \$の罰則が本人に課されます。

本校でも関連の先生方ならびに教職員の皆様の多大なご努力により図書検索サービスや文献複写サービス等を端末にて利用することが可能となっております。まだ、利用していない学生諸君は是非一度この快適なサービスを利用し、よき良本とめぐり会う機会をもたれては如何でしょうか。

最後になりましたが、この滞在の機会を与えて頂いた機械工学科はじめ奈良高専教職員の皆様に深く感謝の意を表します。

図書館の多様化に思うこと part 2

電気工学科 桐島俊之

前回の図書館だよりで「図書館の多様化に思うこと」という題で書かせて頂きましたが、今回はその第2弾です。「図書館の多様化」といっても、既に多くの図書館が様々なサービスを提供している現在では、既に多様化しているとも言えるため、ここでは、近年利用者に急接近しつつあるコンピュータにより拓かれる電子図書館について話を進めたいと思います。

本というメディアは言うまでもなく、グーテンベルクによる印刷技術の発明以来、飛躍的に価格が下がり、誰でも日常的にアクセス可能なメディアです。一方、電子図書館では、コンピュータが閲覧用に不可欠であり、本の様に安価に済ませることが現時点では困難です。また、閲覧用インタフェース技術もまだまだ発展途上の段階にあることは否定できません。コスト高で、使いにくい電子図書館に未来はあるのでしょうか？

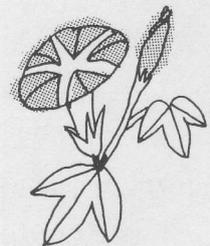
個人的には、断然、電子図書館の将来性に期待しています。その理由は、コンピュータはネットワークによりその可能性を飛躍的に高めることが可能であるからです。例えば、蔵書数の少ない図書館と、国会図書館のような膨大な蔵書数を誇る図書館では、優劣が明らかですが、電子図書館同士のネットワークは、図書館同士の「協力関係」を生み出し、小さい図書館と大きな図書館の不公

平な関係を公平にする可能性を秘めていると言えます。

このような、図書館のネットワーク化は、コンピュータ無しには決して実現しないでしょう。電子図書館により利用者は「情報の局在性」から解放されることになると言っても過言ではありません。以前、米国の大学の研究室を訪問した際に、研究の紹介をするのに自分のホームページを呼び出したことがあります。この時、初めて実感としてコンピュータネットワークの威力を感じました。電子図書館同士が国際的に協力可能になれば、日本にいても外国にいても、どこからでも、いつでも、求める情報にアクセスすることが可能になるのです。これは、恐らく人類にとって歴史的な出来事になると思います。

さて、従来型図書館と電子図書館に別々の役割を持たせる必要があるのでしょうか？個人的には、別々の役割を持たせるべきではないと考えています。つまり、従来型図書館と電子図書館は「融合」されるべきだということです。従来型図書館の優れた人間に対する親和性と、電子図書館のもつグローバル性を如何にして両立させるのか、それが最大のテーマだと思います。

結論としては、「図書館というのは、情報環境を提供する存在であり、まだまだその発展途上にある」ということです。ここで忘れてはならないことは、その情報環境で何を獲得するのかはすべて利用者の「意志」にかかっているということです。今、利用できる図書館の長所と短所をよく観察し、出来るだけ納得できる情報環境に自分の身を置く努力をする、もしできれば、より良くするために新たな視点から提案する、そのような努力があれば、未来の図書館でなくても、きっと素晴らしい経験と知識が得られるようになると思います。



卒業生からのメッセージ

図書館を利用して

機械工学科 喜 多 章

(奈良高専機械制御工学専攻)

奈良高専を卒業するにあたり、文章力のない自分がこんなところに文章を書くとは全く予想していませんでした。

私にとって高専の図書館は初めての図書館だったといえます。高専に入るまで、私は図書館というものに全く縁なく、読書と言えば漫画というような状態で、活字だけの本などほとんど読んでいませんでした。だから、高専入学当初は当然のように漫画の所しか行きませんでした。漫画を全部読み尽くしてしまうと、実習レポートの課題をたまに見に行くか、涼みに行く程度だったと思います。2年になった頃、クラスの友人に勧められ一冊の本を読むことになりました。その本とは「グイン・サーガ」という小説で、現在では本編、外伝あわせて70巻以上でているものです。そんなもんを読んでしまったために私は毎日のように図書館へ足を運ぶようになりました。今考えると1日に3・4冊もよく読んだと思いますが、まあそれだけ暇だったのだと思います。気がつく、ちよくちよく図書館に行ったら小説を借りて読むようになりました。4年になると毎週のようにあるレポート提出のため、借りられる限界まで専門書を借りて課題を書いていました。気がつく、我がクラスが多読表彰で1位になるほど借りており、みんなやるときはやるだと思っていたが、5年になると前の班の調べたものをコピーする人が現れあっさり抜かれてしまいました（在校生はまねしないように）。

現在、私は専攻科生ということでまだ図書館を利用しています。本科生の頃よりは借りる量も減りましたが、用がなくてもふらふらと中をうろつくようになってしまいました。

なんだか図書館の紹介になってなかったような

気がしますが、私のように本なんか読まないというような学生も、1度図書館へきて中をうろついてみれば自分の興味を引くような本がきっとあると思います。

僕の読本法

電気工学科 谷 佑 介

(東洋技研)

どこの学校にも図書室とか図書館とかいうものはあるらしい。その中で奈良高専の図書館の規模がどんなものか知らないですが、いろいろな種類の本が数多く置かれている図書館だと思っています。

ここでは図書館を利用しようという呼びかけを書いたらいいんでしょう。しかし、この図書館使っている人は、ほとんど本が好きの人だと思います。とすると、書くことが思いつかない。仕方がないので僕の本の読み方を紹介したいと思います。

奈良高専の図書館には学校にあってもおかしくないマンガや、学校にあるとおかしいマンガ的な小説があったりします。このおかしいおかしくないというのは、個人的な考え方ですが、つまりお堅い本ばかりでは無いということいいたいのです。他にもLD、ビデオがあり特に洋画の名作が数多く見れます。中には『2010年宇宙の旅』とかいうマニア以外には何がすごいのか分からない物まであります。しかし今回は、一応活字本の読み物ということですのですすめていきたいと思っています。といっても、僕は活字もマンガも映像もほとんど同じ読み方をしているんですがいいでしょう。

まず、本の選び方ですが、これは行き当たりばったりです。例えば題名を見てひかれたら買うなり、借りるなりします。しかし、賞を取ったようなやつや、ミリオンセラーになるような、はやったやつは避けるようしています。でも、もらった本は、もったいないのでどんな物でも読むようにしています。

次に読み方ですが、僕の場合、速読というほどではないですが、早く読んでしまいます。なぜ早いかというと、言葉や文字としてではなくイメージとして読んでいます。どちらかという読むのではなく見るという感覚です。しかしそれでも、内容についてある程度理解し、考えているつもりです。僕はマンガでも、映像でも同じイメージによる“読み”方をしています。

そして、熱中するとその内容の中に入り込んでいきます。物語なら、その世界で自分ならそうするとか、登場人物がどんなことを考えているかとかだけでなく、勝手にストーリーを作り上げていきます。そのほかの、コラム等、著者の考えを書いた物についてはどうしても否定的な見方をしてしまいます。それでも勝手にストーリーみたいな物をつくって楽しんでます。まあ、変わった読み方でも何でもないとはいうんですが……。

全く役にたたず、おもしろくもない文章ですみません。図書館は誰でも、テスト勉強やレポートの調べ物で必ず利用することになると思います。その時に余裕があるなら、他の小説だとかも見に行ってください。といっても、積極的に読もうとか思わないで、おもしろい題名だなあとか、軽い気持ちで本を取ってみてください。もしかしたら、新しい世界が広がるかもしれません。

図書館だより

電子制御工学科 波多野 康彦
(三重大学)

高専に入学して大して何もしていない自分がこういった形で図書館だよりに文章を書けるのは、思いもしなかっただけにとてもうれしいです。

確かに自分は、暇さえあれば図書館に行っていました。しかし、皆さんも同じだと思いますが、1年、2年のときは図書館に入って左側ばかりで全く右側に行ってませんでした。一年の前期はマンガばかり読んでいて、3年になるまでは小説や歴史書や心理学などいろいろなものをよんだり、LDもほとんど鑑賞しました。しかし3年以上に

なると実験のレポートのために専門書を調べに図書館に来ることが多くなり、4年では編入試験のために図書館に残り勉強を、5年では、編入試験のための勉強もありましたが、来館の多くは卒業研究のためでした。

しかし、図書館を別の利用のために行く時もあります。例えば、LDやビデオを見に行く時。しかし、LDやビデオを放課後に見ると夢中になってクラブに行くのが遅くなってしまふことが、多々ありました。また、夏に昼休憩や授業が自習になると、とりあえず涼しい図書館に行きました。

他に、図書館なのに喫茶店のように待ち合わせ場所に使い、コーヒーのかわりとして本を読んでいる人もいました。だから、高専に5年間もいると、図書館はこういう雰囲気なのだと思っていました。現在自分はM大学にいますが、大学には附属図書館があります。しかし、この図書館は、高専の図書館の雰囲気とは違い、「シーン」と静まり返っていて初めて入ったときは静か過ぎて耳が痛いぐらいでした。でも、勉強するには最適ですし、規模も高専の図書館の5倍ぐらいで、これが大学の図書館かと思いました。

最後になりましたが、皆さんに一言。高専5年間は長いようで短いです。それは、4年から急に忙しくなるからです。高専は、ほかの高校と違って受験がないから、1年～3年の間にやりたいことのほとんどはやれるはずですよ。ですから、図書館で「人生とは……」と悩んだり、クラブで汗を流したり、昼休憩にサッカーをしたり、バイトしたり、ロボコンに出たりして、留年しない程度にいろいろなことに挑戦して見てください、きっと新しい発見とともに高専生活が楽しくなるでしょう。

本のある生活

情報工学科 駒形 伸子
(奈良女子大学)

今でも毎朝、気を抜けば高専の方向に向かってペダルをこぎだしてしまいそうになる、在校生気分抜け切らぬ私が、“卒業生からのメッセージ”

を書いているとは…。なんだか不思議な気分です。

私自身、本を読むことは好きなのですが、じゃあ図書館もよく利用していたのかといえば、それはまた別の話で、まわりの友達の方がよっぽど活用していたのではないのでしょうか。ですから、依頼を受けておいて、メッセージらしいことは何も書けませんが、とりあえず個人的な話をちょっとだけ。

大学に来てからの私は、今までよりもずっとたくさん本を読むようになりました。構内で手軽に買えるから、というのもあるのですが、何といても、通学の行き帰りに本を読む時間ができたことが大きいと思います。

毎日電車で揺られながら読書にふける…。これは、自転車通学をしていた高専時代からのささやかな憧れでもありました。それが現実となった今、駅のホームや電車の中で、何気なくカバンの中の本に手を伸ばしている自分がいます。そして、片道わずか10分程度ではあるのですが、満員電車と無縁であることが幸いして、“程良く静か”という、私にとって最高の読書空間ができあがるのです。

『本のある生活』だなんて、いかにも“どこから拾ってきた”ような安易なタイトルをつけてしまいましたが、たまたま家に本を置き忘れた日の車中での何ともいえぬ虚しさは、今の私にとって本当に本が生活の一部になっているんだということを実感させます。

この前、大学の授業が休講になったので、附属図書館に行って、(高専のときもよくそうしていたように)館内のすみからすみまで、本の背表紙眺めながらぶらぶら歩いてみました。高専の図書館と比べるとはるかに広いので、全てをじっくり見たわけではありませんが、この大学の設立背景からか、教育関係の本が多かったように思います。しかし、残念ながらパッと手にとって読みたくなるような小説の類は見当たらず、だからでしょうか、ここの図書館ではいつも、レポートを仕上げのために来ている学生がちらほらいるだけで、本を読むために立ち寄ったような人をほとんど見かけません。それにしても大学の図書館はとても静

かです。図書館が静かなのは当たり前ですが、ここまで静かだと、自分でページをめくった音にまでビクッとしてしまうくらいで、どうも落ち着けません。

“図書館が静かなのは当たり前”——そういえば、そうでないところもありましたね(笑)。私などは、用があって行ったにもかかわらず、大勢の学生が館内でワイワイ騒いでいるのを見て、「今日はやめとこう」と引き返したこともありました。あの騒々しささえなければ、高専の図書館って気軽に本が読める素敵な場所だと思います。実際、静かな時間をねらって行った時にはとても居心地がよかったのを憶えています。高専の図書館の場合、いくら静かであっても、今の大学のような張りつめた静けさではありませんでしたから。

ここまで書いてきて、また高専の図書館に行ってみたくまりました。それで今度、一般利用者の登録をしようかなと思っています。もし現役高専生に紛れて本を読んでいる私を見つけたら、声をかけて下さいね。

図書館だよりに寄せて

化学工学科 有吉 夕貴子
(日本触媒)

図書館だよりに「卒業生から」というテーマで千字ほど書いて欲しいといわれた。五年間随分利用させて頂いた図書館の方々からのお話だから薄情な私でもお断りできない。

そのくらい図書館にはお世話になった。図書館ではレポートの相談や作成、二、三年のころは友達と内緒話をしにいたりもしていた。しかし、私の主な使用目的は小説や詩集、ノンフィクションを借りることだった。調子が乗ってくるとかなり広範囲のジャンルを文字通り読み漁り、寝る時間も惜しかった。

私が本を選ぶときの基準は、タイトルの響きと背表紙や表紙のデザインが中心であり、新聞の新書案内から知ることが多い。私にとって本を選ぶ

という行為は、思い付いた通りにやっても安心な行為である。だから、刺激的でありながらリラックスできる。本は情報や疑似体験を与えるだけなのに大袈裟だ、と思う人もいるだろうがそんな人間も一人存在するのだ。けれども、実際の生活の中で思い付きで行動することはほとんどなかった。そんな私だったが、ある時期から少しずつだが確実にいろいろ興味を持ったことに挑戦するようになった。

その中でも特に印象に残った体験は、盲学校での点訳・手引きの開放講座だった。タウン誌に紹介されていた案内を見て往復はがきで申し込んだ。動機らしい動機などなかった。ただ、「これは面白いぞ」と私の中のどこかが思ったのである。小さな子どもが「あれなに?」「これなに?」と聞くのと同じレベルであったかもしれない。

そして、まだまだ暑い八月の末に私は初めて県立盲学校にうかがった。私の感覚は正しかった。点字の綴り方と約束事、点字と墨字（目で読む活字のこと。この文章は墨字）両方ある絵本、目の

不自由な方を案内するときの基本的ルールとその実習（目隠しして案内しあっこする）、そして盲人バレーや盲人卓球に挑戦するなどいつも新鮮な知識と体験が待っていた。当時は無邪気に楽しんではいたが、それが目新しくとも何ともない人や、やむを得ず新しい世界に足を踏み入れる人にとって現実の世界であるというふうに考えてはいなかった。

しかし今は、それぞれの本は読者に情報や疑似体験を提供するだけでなく、「読書」体験そのものに不可欠なもので、点訳することにより体験の選択肢を広げることに少しは力が貸せるかもしれない、そう考えている。卒論などで忙しかったこともあって今は何も活動していないが新しい生活になれば、また点訳の勉強をしたいと思っている。

最後に十七歳の私に読書の楽しさを再認識させてくれた図書館と、図書館を支えて来られた全ての方々、盲学校開放講座のスタッフの方々、そして拙文を最後まで読んでくださったあなたに、ありがとうございます。

新任教官からのメッセージ（その1）

本とインターネット

物質化学工学科 大久保 陽 子

はじめまして。本年4月1日付で本校物質化学工学科助手に着任致しました大久保と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

インターネットが流行し、あらゆる情報が簡単にインターネットで得られ、そのうち本の存在がなくなってもおかしくないような気がするほどの昨今ですが、本にはそれに勝るとも劣らぬ魅力があると思います。本をパラパラとめくると全体像が瞬時に得られる点、部分的な拾い読みがすぐにできる点、いつでもすぐに前の箇所に戻る点など数えあげるときりがありません。全体像をとらえながら知識、考え方を体系的に学んでいける

「本」はどんなにインターネットが進んでも、その価値が衰えることはないと思います。（もちろんインターネットも有用な情報源ですが。）本校図書館は土曜日にも開館しており、また職員よりも5年生、専攻科生のみなさんの方が書籍の貸し出し冊数が多くなっているなど、学生のみなさんが利用しやすいよう考慮された運営が行われていると思います。

買うとかなり値段の高い専門書なども図書館にはたくさんおいてあります。日々の勉強や自宅学習、研究にクラブ活動等忙しい学生生活を送っておられることと思いますが、図書館を積極的に利用されて学生の間でできる限り本を読まれることをお勧めします。

心に残る一冊の本

— 〈あなたにも薦めたい〉 (その8) —

『塩狩峠』

(三浦綾子)

一般教科 加 地 朱

明治時代に、自分の体を線路上に横たえることで、脱線しそうな汽車を食い止め、他の乗客全員の命を救った青年がいた。『塩狩峠』は、この鉄道事故で一人だけ命を失った青年をモデルにして、彼がキリスト教の信仰を得るまでの過程を描いたものである。

主人公の永野は、幼いころ、キリスト教徒である、実の母親と暮らすことはできなくて、キリスト教を嫌っていた祖母に育てられた。祖母のあっけない死後、永野は、自分がキリスト教徒であることを自分の母親に隠し続けた父と、これまで永野と別居していた母や妹と共に暮らすことになる。キリスト教に触れる機会が多くなった永野だが、キリスト教を信じることは、なかった。

その彼がキリスト教に興味を持ったのは、自分の結婚問題など、女性に対する感情を考えるようになってからである。その後、鉄道会社の同僚の不祥事に対して、永野は、その同僚の支えとなって、キリスト教の信仰に忠実に生きていこうとする。同僚には、彼の思いは通じないけれど、それでも、永野は諦めることは、しなかった。

なぜ永野は、彼を理解しない同僚を見捨てることがなかったのか。彼は、自分が生きている意味は、神を信じて過ごす日々の暮らしのなかにある、と考えている。「ぼくは毎日神と人のために生きたいと思う。」永野は、自分が多くの人のための犠牲になる前夜に、こうも話している。「お互いにこのくり返しのきかない一生を、自分の生命を燃やして生きて行こう。」彼は、青年時代に考えても、わからなかった、自分が生きている意味を、同僚の支えとなろうとしているときに、信仰

のなかにみつけたから、同僚を見捨てることをしなかったのだ、と私は考える。

それぞれの人には、それぞれが生きていくなかで、他のものを捨てても、或るものは、決して捨てられないものがある。或る人にとっては、家族の幸せであったり、別の人にとっては、名誉であったり、ひとそれぞれだ。主人公の永野にとっては、神への信仰であった、と思う。永野は、結果としては肉体の死を選んでしまうが、それは、けっして不幸であった、とは、私には思えない。私は、彼がうらやましい。なにかのために、自分の命を捧げることさえできるものを、彼はみつけれられたのだから。あなた方は、何を支えにして、生きたいと考えるだろうか。

『はれた日は学校を休んで』

(西原理恵子/双葉社)

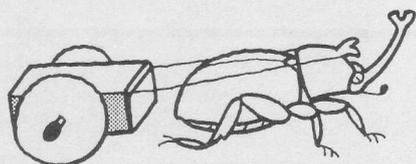
機械工学科 平 俊 男

この本の表題作は「小学6年生」に連載されたものだったことを最初にことわっておきます。高専生に自信をもって薦められるようなものじゃないのかもしれませんが。育てていたインコのまあちゃんが死んで一晩泣いた次の朝、「家の中もおとうさんもおかあさんもちっともかわってなくて/私は学校に行った」小学生の時。友達との仲違いで学校に行かないと言ったことへの両親の心配に「明日は学校に行くんじゃない/みかちゃんと仲なおりにいこう。」うそをついてしまった後悔。ずる休み。デートのようなにちようび。大人になることの不安。同時に収録されている「やまもとくんとまぶだち」とともに、もう忘れてしまったはずだけれども、きっと誰もが思い当たる子供の頃が西原理恵子ならではのトーンで描かれていま

す。キーワードは、学校、家族、友達といったところでしょうか（特に、父親の顔がなぜかひとつとしてまともに描かれていないのが気になります）。

この本を読みながら自分は、まっすぐ家に帰ることのなかった中学生の頃や自転車に乗ってひたすら遠出を目論んでいた小学生の頃を思い出していました。なぜかレンゲ畑に4、5人で寝転がってひたすら空をみている、連れの家で奈良漬けに酔っぱらったり、大和川にかかる鉄橋のプレートガーダの間に潜んだり...ハトがカモメに食べられるのをみている、高圧線の鉄塔の下で雲を見て目が廻ったり、田圃に落としたり落とされたり...そんな頃に毎日何を考えていたのか今となつては自分でも全く思い出せません。いつも空は青く、雲は白くそして太陽は眩しかったような記憶だけが残っています。いまはもうどこにもない時間と場所ですが。もちろん、ここでこの本を挙げたのは、自分の回想話をするためではありません。この本を読む人が過去の記憶に耽ることを期待するわけでもありません。誰もが、自分が自分となっていくためにこういった日々を過ごし、そして多分それは主観的にはともかく、客観的には幸福な時間だったということ、たまには思い出して、今の自分を考えるのもいいのじゃないかと思ったりしています。

一冊だけというのはやはり難しいので他の本も薦めておきます。『みそっかす』（幸田文）、『僕のコードモ時間』（南伸坊）、『鉄塔武蔵野線』（銀林みのる）、『森に降る雨』（関川夏央）、『おもひでぼろぼろ』（岡本蚩・刀根夕子）、『こうばしい日々』（江国香織）。皆さんが日頃親しんでいるはずの専門書に比べればちっとも役に立たないかもしれませんが、ここに挙げたのに限らずいろんな本を読んでみて下さい。



『かっこいい”WWW”ページを作るために読む本』

情報工学科 武藤 武士

WWW が一般に普及するスピードには目をみはるものがあった。それまでは、インターネットのコミュニケーションといえば電子メールや Net News の文字ベースの情報交換がせいぜいであったが、画像や音声も扱えるようになり、一挙に一般の人の興味を引くものになったようだ。最近では学生も学校や自宅で様々な内容のホームページを作っているようだが、見ために派手で楽しいページが多い。学生が自主的にこのようなページを作るのはむしろ歓迎すべきことだと思うし、世間の流れもどんどん WWW ページを派手にしようとしているようだ。

WWW ページを作る時に参考になる本がローラ・リメイさんの「HTML 入門 第2版 WWW ページの作成と公開」である。この本が普通の HTML の書き方の本と異なる所は、「何故 WWW ページを作成するのか？」や「どういうページを作ればたくさんの人に情報が伝わるのか？」といった普通は省略されがちな内容についてかなりのページを割いている所だろう。世の中にはテキストモードブラウザと呼ばれるキャラクタ端末で WWW ページをみるためのものがある。もちろん、このブラウザでは画像を見ることができないが、音声出力装置と組み合わせることで目の悪い人でも情報を得ることができるという利点がある。せっかく情報提供するのだから、少しでも多くの人に見てもらいたいと思うのは当然だと思う。その為の手段として、派手なページを作るのも悪くないが、そんな人達のことを考えたページを作れる人の方がほんとうはかっこいいのではないかなと思う。

何はともあれ、作って見ないことには始まらない。リメイさんの本を読んであなたもページを作って見てはいかがだろうか？教育用電子計算機室や情報工学科の実習室では自由にページが作成できるようになっているのだから。

『安全のカード』（星新一）

情報工学科 本 間 啓 道

私がこの本と出会ったのは10年程前、まだ高専生だった頃だ。それまで本などほとんど読まなかった私が、なぜこの本を読むに至ったのかは全く覚えていない。しかし、この本のおかげで、その後の読書の習慣が作られたのは確かである。

在り来たりの言い方をすれば、この本は私に本を読むことの楽しさを教えてくれた。それまでの私にとって、「読書」とは漫画を読むことに他ならなかった。「字ばかりの本を読んで、何が面白いのか？」そう思っていた。しかし、初めて読んだ星新一のショート・ショートは非常に面白かった。なぜか？一般論はその辺の解説に任せるとして、私のがめり込んだ大きな要因は、とにかく、

一本一本が非常に短く、構える必要が無い。僅かな時間で結末を知ることが出来る。これに尽きると思う。漫画しか読んだことの無かった私にはちょうど良い長さだったのである。その後も星新一のショート・ショートのほとんどを読み漁った。

本を読むことの楽しさを知った私はその後、アシモフのSFや、三国志といった長編にも手を出すようになり、いつしかショート・ショートから離れてしまった。星新一が1001編ものショート・ショートを残したのを知ったのはつい最近である。これを機会に1001編読破に挑戦しようと思う。

星新一のショート・ショートは奈良高専の図書館にもきっとあるはず。学生の皆さんも、勉強の合間の気分転換に、通学時の電車の中で、是非1001編にチャレンジして頂きたい。

知って得する

図書館超利用法

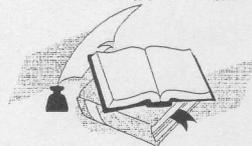
知っていますか、こんな利用法、あんな利用法
今まで知らずにいて損をしていたあなた、
さあ、今日からは目一杯利用しよう！

予 約 読みたい本が貸し出し中の時、返却されるとすぐ借りられるように予約する。

一夜貸し 禁帯出になっている参考図書も、一夜だけ貸し出します。
ちょっと借り出して生協でコピーも可！ ということ。

希望図書 読みたい本が図書館に置いてないときは、この手を使おう。
カウンターに備え付けてある「購入希望図書リスト」にできるだけ詳しく記入する。

貸出冊数 専攻科と5年生は6冊までです。（1～4年生は4冊）
雑誌やCDも貸出可。



平成10年度読書感想文コンクールについて

本年度の読書感想文コンクールを、例年通り図書館委員会と国語科との共催で行います。先生方からは以下の21冊が参考書として推薦されました。このほかにも興味のある本があれば、自由に選んでもかまいません。3年生以上は自由参加ですが、積極的に多数の応募があることを期待します。

☐文学作品

十五少年漂流記	(ジュール・ヴェルヌ)	角川文庫
いちご同盟	(三田誠広)	集英社文庫
ぼくは勉強ができない	(山田詠美)	新潮文庫
坊ちゃん	(夏目漱石)	新潮文庫
どくとるマンボウ青春期	(北 杜夫)	中公文庫
恢復する家族	(大江健三郎)	講談社文庫
殺人容疑	(デイヴィッド・グダーソン)	講談社文庫
ライ麦畑でつかまえて	(サルンジャー)	白水Uブックス
うわの空で	(スザンナ・タマーロ)	草思社

☐文学作品以外の部

小学生に授業	(河合隼雄・梅原 猛)	小学館文庫
ごみから地球を考える	(八太昭道)	岩波ジュニア新書
子どもたちの太平洋戦争	(山中 恒)	岩波新書
パパラギ	(ツイアビ)	立風書房
ワイルド・スワン 上中下	(ユン・チアン)	講談社文庫
なぜV字で飛ぶか	(小野 学)	小学館文庫
全国アホ・バカ分布考	(松本 修)	新潮文庫
絶対音感	(最相葉月)	小学館
オフト革命	(軍司定則)	祥伝社ノン・ポシェット

☐同和教育関係

兎の眼	(灰谷健次郎)	角川文庫
娘に語る祖国	(つかこうへい)	光文社
沖縄一戦争と平和	(大田昌秀)	朝日文庫

平成10年度（1998年度）・図書館委員会

本年度の図書館委員会と学生図書委員会のメンバーおよび役割分担が次のように決まりました。

図書館委員会			学生図書委員会				
館長：中和田 部会長：山内・中田・大植 (事務部：杉本・福井・清水)			委員長：出水（4 I） 副委員長：新（2 E）		広報担当部長：藤田（3 S） 調査担当部長：土屋（4 E） 図書担当部長：山野井（1 M）		
図書部会	視聴覚部会	研究紀要部会	M	E	S	I	C
山内・細井 福嶋・和田 中田・五十嵐 大植	中田・福嶋 和田・山内 五十嵐・大植	大植・細井 和田・山内 中田・五十嵐	1 山野井祐太 2 辻 健太郎 3 小坂田達也 4 古川 泰行 5 中川 良美	宮本 英明 新 将司 中前 哲夫 竹重 隆正 土屋 雅信 安田 貴雄	川崎可奈子 村田 祐一 藤田 直生 本多 弘樹 三浦 良太	西川 猛司 響 華代子 岡本 圭司 出水 将樹 東岡智恵子	山口 宏治 松本 順子 生野 恵 小野 裕香 ユーリオノ

図書館委員担当曜日				
月	火	水	木	金
細井 中田	山内 大植	和田	五十嵐	福嶋

◇◆◇ 平成9年度（第2回）多読表彰について ◇◆◇

クラス別多読表彰は、平成9年度で第2回をむかえました。第2回では新たに、努力賞（前年度に比べ、順位がアップしたクラス）および奨励賞（6, 7位のクラス）を設けました。4月はじめの全校集会において結果発表を行い、校長先生から表彰を受けました。

第1位に輝いた1Sは年間一人当たり38.6冊と本当によく読んでくれました。平成9年度の年間努力目標の20冊に到達したのは8クラスもあり、前回の3クラスからかなり増えました。また、全校平均は、16.2冊で、これも前回の13.3冊に比べかなり増加しました。まことにうれしく思います。

第3回（平成10年度）多読表彰はもうスタートしています。昨年度多読上位クラスは、より高い目標を設定し、下位クラスは昨年度の平均以上を目標に、読書・学習に励まれることを希望します。

第2回多読表彰上位5クラス努力賞3クラス（内4位を含む）、および奨励賞2クラス合計9クラスの希望図書は既に購入されました。現在、対象クラスが購入図書を読破していますが、読み終わり次第、全学生に開放いたしますので、しばらくお待ち下さい。

第2回クラス別多読表彰クラス（平成9年度）

順位・賞	クラス	貸し出し数	賞品
1位	1年電子制御工学科	38.6冊	4万円相当の図書
2位	化学工学専攻	33.4冊	3万円 "
3位	2年電子制御工学科	28.5冊	2万円 "
4位・努力賞	4年機械工学科	27.0冊*	1万5千円 " **
5位	3年情報工学科	26.7冊	1万円 "
6位・奨励賞	1年化学工学科	22.1冊	5千円 "
7位・奨励賞	1年電気工学科	20.4冊	5千円 "
努力賞	2年化学工学科	13.9冊*	5千円 "
"	4年電子制御工学科	14.6冊*	5千円 "

* 4M……26位（平成8年度）から4位（平成9年度）へ
 2C……30位（ " ）から18位（ " ）へ
 4S……25位（ " ）から15位（ " ）へ
 ** 4位（1万円）と努力賞（5千円）



第10回 ブック・ハンティング

「ブックハンティングとは何か？

という貴方のために」

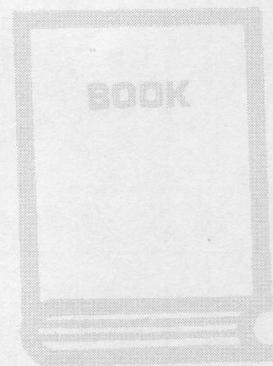
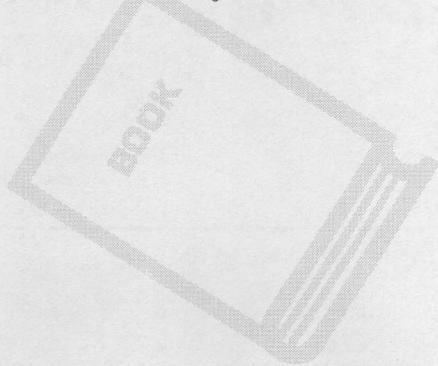
情報工学科4年 出水 将樹

ご存じの方も多いと思いますが、本校にはブックハンティングという独自の図書購入法があります。ブックハンティングは図書委員が中心となって、文字どおり本（漫画は基本的に不可）を買いあさるもので、毎月6月・10月の二回行なっています。

私は二年のときから図書委員をしているので、何回がブックハンティングをしています。欲しい本を自分の懐を気にせずには買えるというのは実にうれしいことです。今思い返せばずいぶん無茶な本も購入したように思いますが、それは若気の至りと言うもので、決して悪意はなかった（はず）です（もっとも現在の人気図書ベスト10には当時入れた本がかなりは入っているので、図書館利用者数増加に一役買ってはいるのですが…）。

さて、今年の春期ブックハンティングは、6月25日（木）に行いました。今回もほぼ例年どおり11人の参加者が近鉄郡山駅前の啓林堂書店に集い（ほかのお客さんに迷惑をかけていないはずですが…どうだったでしょうか？）、てんでバラバラに本を買っていました。もっとも最近では文庫本（特にSF、ファンタジー系）の購入を自粛している（図書館に大量には入っていますから…）ので、専門書のたぐいをいれる人が増えたように思います。それでも、ありとあらゆる種類の本が段ボール箱に詰め込まれる様子は、本校のバイタリティを物語っているようで、なかなか興味深いものがありました。

この文章でブックハンティングの楽しさを伝えることは不可能です。ブックハンティングの楽しさを知るには、実際にやってみるのが一番だと思います。貴方もブックハンティングに参加してみませんか。



図書館からのお知らせ

夏季休業中（7月21日～8月31日）の開館時間等は次のようになります。
☆開館時間 *平日 8時30分～17時 *土・日曜日 休館
☆閉館日 8月11日（火）～8月20日（木） 蔵書点検のため
☆貸出冊数 6冊（7月8日（水）より）

— 見つけよう、心に残る一冊を！ —

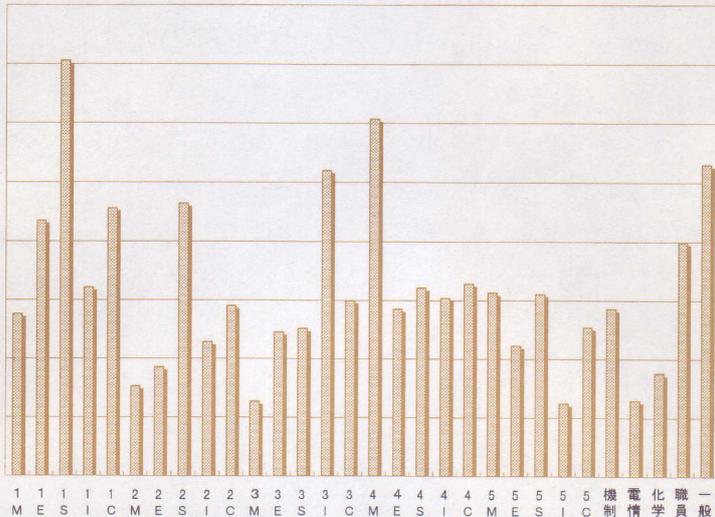
平成9年度図書館利用状況

◇開館日数	270日
平日	234
土曜日	36
◇図書館入館者数	113,039人
平日	107,009
土曜日	6,030
◇一日平均入館者数	
平日	457
土曜日	167
◇図書貸出延人数	11,652人
学生	10,611
教職員	530
一般	511
◇図書貸出冊数	19,098冊
学生	17,239
教職員	798
一般	1,061

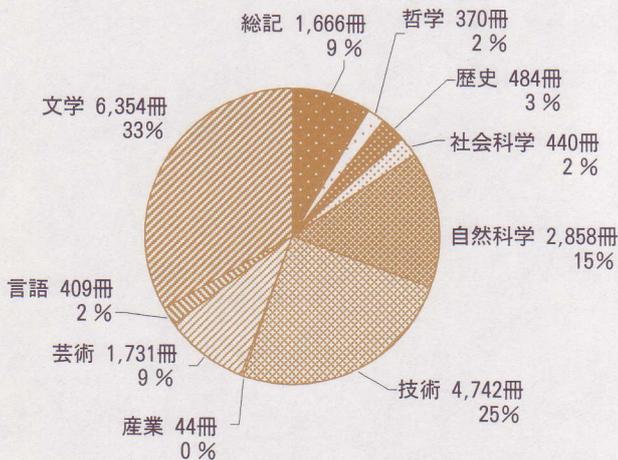
貸出冊数

1	1,600
1	1,400
1	1,200
1	1,000
2	800
2	600
2	400
2	200
3	1,000
3	800
3	600
3	400
4	1,200
4	1,000
4	800
4	600
5	600
5	400
5	200
5	100
機	500
電	400
化	300
情	200
学	100
員	100
一	100

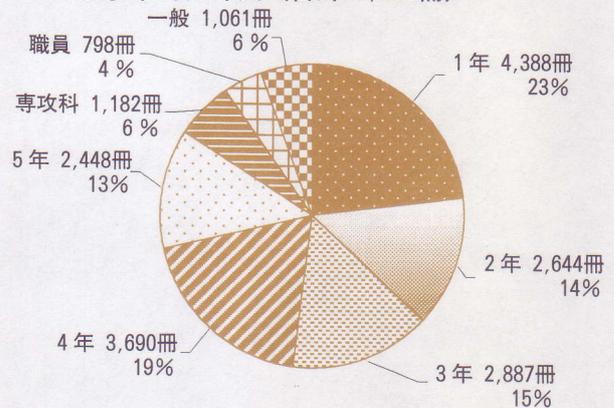
クラス別統計表



○分類番号別統計表 (合計19,098冊)



○学年別統計表 (合計19,098冊)



編集後記

今回、情報化と図書館のテーマで、特集を組み、4人の先生から図書(館)の新しい利用について、特別寄稿を頂戴いたしました。また、多くの卒業生の皆さんから心のこもったメッセージに加え、新任教官の若い先生にもメッセージを頂戴いたしました。さらに心に残る一冊の本では、もう4人の若い先生に心に残る本を紹介して頂きました。ご多忙のところ快く執筆をお受け頂いた皆様に、心より感謝いたします。

今後、この図書館だよりをより充実するため苦慮しておりますが、皆様からも良い提案がありましたら、図書係に一言声をかけて頂ければ幸いです。(委員一同)